

## 親子の会話

【中学生になると親と話をしなくなる。親はそのことにうまく対応できずに、トラブルになることがある。先生はどちら側でものを言えばいいのだろうか】

中学生くらいになると、特に男子は口数が少なくなる場合が多い。子どもによっては小学校5,6年生くらいからかもしれない。今までは帰ってくると、こちらから聞かなくても学校のことや友達のこと、先生のことをべらべらと話していた子どもがしゃべらなくなる。親としては不安だ。何が不安かという、学校の様子が全然わからない。不安だから聞きたくなる。しかし、子どもはしゃべりたくない。最後は「うるせーなー」で終わる。

子育てでは、親子の会話が大切だ、とよく言われる。会話をしなくてはいけないと、親はあせる。しかし会話にならない。そこで親は「勉強しているの？」と聞く。親にとっては、会話にならないから「今日はいい天気ですね」と同じような、気軽な言葉なのだ。だが、子どもにとっては勉強に関する話はしてほしくない、という場合が多い。気まずい雰囲気になるのがオチだ。親は子どもの態度が気に入らない。気に入らないと思うと、いろいろなことが気に入らない。テレビばかり見ていること、ゲームばかりしていること、漫画ばかり見ていること、言葉遣い、姿勢、……。気に入らないから注意する。子どもは余計に反抗する。悪循環だ。

ちょっとしたことで、口ごたえしたり、反抗したり、怒ったり。親は今度は子どもに腫れもにでも触るように接するようになる。多くの場合に、まず母親が子どもとうまく関係が作れなくなる。ここで父親が登場する。「お父さんから○○に言ってよ」だ。父親は少くらのことはどうでもいい、最後の最後に自分が出ていけばいい、と思っていることが多いから、子どもに対して「少しは勉強もやれよ。」程度に、簡単に終わらせてしまう。母親はこれがまた気に入らない。自分ばかりが苦勞して、父親は全然協力してくれない、となる。今度は夫婦の仲までおかしくなる。

さて、何がいけないのか。親が子どもから学校の様子など話を聞きたいのは、当然の心理である。しかし子どもの側からすれば、家では少しはゆっくりしたい。学校で先生に勉強しろ、と言われ、家でも親から同じように言われる。学校にも家にも先生がいるのでは、いたたまれない。自分の心の置き場所がなくなる。また、会話が成立するには話題が必要だ。子どもと共通の話題があるのかどうかをまず考えてみるようにしたらどうだろうか。もしないとしたら、共通の話題を作らなくてはならない。一緒に遊ぶとか、同じテレビ番組を見るとか、同じゲームをするとか、どこかに一緒に出かけるとか、何かを一緒に作るとか。中学

生になっても子どもと会話ができるという親子は、それまでに会話のネタを作ってきている親子だ。「あの家の～ちゃんは、親とよく話をするのに、うちの子はしない」のではなく、～ちゃんの親は、会話のネタを今までに多く作ってきているのだ。

もう一つは、思春期というのは自立への過渡期のようなものだ。だからある意味では、親との会話が少なくなって当然なのだ。そういう時期なのに根ほり葉ほり聞き出そうとすると「お母さんはお節介で、くどい」となってしまう。自分でも気分の悪い日に、いろいろ聞かれるとうとうしいと思うことがあるのではないかな。よく話をする日にもあるから、そういう時に、いろいろと聞けばいい。

『畑の雑草をとりながら、母が教えてくれた言葉。』

「末は博士か大臣か、どうたわれているが、お前、博士にも大臣にもならなくてよい。人は、いつも目の前に、やらねばならない一番大事なことがある。それを立派に成し遂げるのが、本当に偉い人なのだ。今のお前の目の前の仕事は、草取りなのだ。』

母一人、子一人の親子である。これに勝る親子の会話は無い。この母親を私は直接知らないが、息子は知っている。私の大先輩の先生だ。私の尊敬する素晴らしい先生である。

勝手なことをいろいろと書いてきたが、やはり親子の会話というのは重要なことだと思う。しかし、自分の子どもだから親に話をして当然、というのは自我の目覚めはじめの中学生には当てはまらない。会話をするには、何らかの努力がお互いに必要なのかもしれない。

最後に中学生諸君にも言いたい。(この部分は是非子どもにも読ませてもらいたい)

お父さん、お母さんが「勉強しろ！」とか「テレビばかり見ていないで……」というのは、君たちに説教をしているばかりではない。君たちとの会話のきっかけを求めているのだ。君たちがもっと素直に親と話をすれば、ずいぶんと親も違う態度になるだろう。「うるさい親だ」ではなく、親の気持ちも少しは考えてみてはどうだろうか。